

# I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

## 7. 緩和ケア専門病院のボランティア—愛和病院の取り組み

今城 慰作\* 山田 祐司\*\*

(\*愛和病院 チャプレン・ボランティアコーディネーター \*\*同 内科)

### はじめに

愛和病院（以下、当院）は1997年10月に、既存の内科病棟28床と併設し、16床の緩和ケア病棟を設立した。その後、2008年2月より、増改築し48床の緩和ケア専門病院として、現在に至っている。

増床の背景には、緩和ケア病棟（16床）開設後、数年を経た頃から、常に緩和ケア病棟は満床状態であったことがある。緩和ケア希望の患者さんが退院されれば、内科病棟での待機者が緩和ケア病棟へと移動するような状況であった。希望していても緩和ケア病棟への入院が実現できないケースも数多くあった。もちろん、内科でも、スタッフの思いや治療方針は共通であったが、ハード面の違いや、違う病棟へ移動することにより、スタッフや環境が変わることが、患者さんの負担にもつながっていた。現在は、病室が変わることが若干あっても、そのようなことは少なく、患者さんへの負担はなくなっている。しかし、地域でのニーズは強く、48床でも不足している状況で、人員が整い次第、64床の緩和ケア専門病院に増床する計画をもっている。

このような病院の体制が変化するなか、ボランティア会は試行錯誤しながら、その時々でのニーズに応じて活動と組織を築きあげてきた。現在、30名ほどの会員が活動している。

大規模な緩和ケア専門病院として、スタッフもおのおのできるかぎりの力を尽くしている。ボランティア会の側からいえば、16床であった頃とはずいぶんと体制や物理的環境が変わり、活動の変更、改革が必要となっている。現在はその改革の途上にある。筆者は病院専属のチャプレン（キ

リスト教の牧師）である。入職後3カ月目から、ボランティアのコーディネーターを兼務することになった。

ここでは、16床の頃から築き上げてきた活動を紹介し、緩和ケア専門48床の病棟となり、これから増床することも視野に入れつつ、今後の展望を述べたい。紙数の限りもあり不十分であるが、簡単にボランティアをコーディネートするという役割と内容について筆者が考えてきたことも記すことにする。

### 目的と役割

ボランティア会への入会希望者に対して、はじめのオリエンテーションで活動の目的を次の3点で伝えている。

- ①入院されている患者さんとご家族のQOL（生命や生活の質）の向上を援助すること
- ②患者さんの気持ちを理解し、耳を傾け、そのうえで、患者さんの望みや希望を支えていく
- ③患者さんの人生に深い敬意を払いつつ、共に学び合いながら、成長していくこと

特に、③はボランティア自身の活動のモチベーションにつながっている。

さらに5点の留意点を伝えている。

- ①患者さんの情報・プライバシーについての守秘義務の徹底すること
- ②活動の目的以外の目的（販売、政治や宗教などの勧誘）を持ち込まないこと
- ③病院の方針、秩序を理解のうえ、責任をもって活動し、指示に従うこと
- ④無理のないところで、できることを、できる範囲で自由意志をもって行うこと

表1 ボランティア活動

お茶会のお手伝い	月～木	午後2時半～4時半, ティーラウンジ
音楽会	水(定期的)	午後2時半～4時半, ホール, チャペルなど
映写会	水(定期的)	午後2時半～4時半, ホール
レクリエーション	随時	部屋やお茶会の会場にて
礼拝の手伝い	火(毎週)	午後1時半～2時半, チャペル
定例会	最終火曜日	午前10時半～12時半, ホール
病室訪問	随時	訪問のための研修を受けたものが、患者のニーズに応じて、コーディネーターの調整の指示により訪問する
行事の手伝い	随時	遺族会, グリーフケア, 外出(お花見, 紅葉), 誕生会, 季節の行事, 冠婚葬祭の介助など
その他	随時	患者さんの要望に応じて、外出や散歩の介助, 食事会の設定, お買い物, お花の手入れなど

⑤困ったこと、気づいたことがあれば、必ず担当者に連絡・報告・相談をすること

## 個々の活動について

すべての活動の前後には、15～30分程の準備とミーティング(申し送り、反省会)を行い、患者の状況を伝え、そこで行われた内容を共有している。活動自体は40分ほどである(表1)。

特別なケースとして、特定の患者さんが好物の食事(中華料理)を一緒に作ったり、タバコを吸う仲間として、毎日タバコに付き合ったり、半身麻痺の患者さんが自伝を書くための口頭筆記をしたり、毎朝(特定のボランティアが出勤前に)、痛みを緩和するために身体を擦るなど、個々に応じた活動を行ってきた。

## 活動の意義

スタッフでは特定の人に対して、特別に(不公平に)時間を費やすことには限度があるが、ボランティア活動では個人に対して存分に時間を費やすことができる。特に緩和ケア病棟では、患者さんの状態が刻一刻と変化しているため、要望に対して迅速に対応しなければ、実現できないことも多い。その点において、ボランティアの機動力によって実現できたことも多くあった。

ボランティアは、病院内では感じられない季節

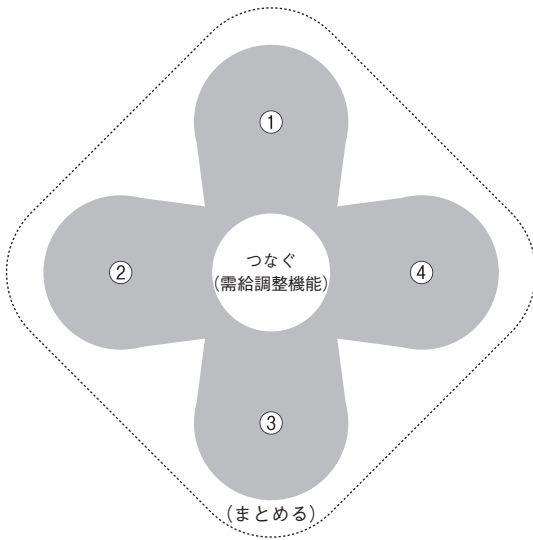
の空気を運んでくれる。また、スタッフには遠慮して言えない悩みを打ち明けることもある。それらを通じて、病院が目指している全人的な医療の力添えを展開できてきた。

## ボランティアのコーディネートとは

コーディネーターの仕事について、筆者は専門家ではなかったが、研修会や施設見学、著作物を通じて学んできた。筆者は、施設内での活動において、コーディネーターのようなボランティアと病棟をつなぐパイプ役となる存在は必要不可欠であると考えている。では、コーディネートとはどういうことなのか、大阪ボランティア協会発行の『ボランティア・コーディネーター』より抜粋した図1が参考になる。

この図をもとに、当院において、どのような機能をしてきたのか説明する。

- ①知らせる(情報提供): 活動前後のミーティングを通じて患者さんの様子など
- ②育てる(養成, 教育): 月に1度の定例会での学習会を通じて活動をチェックしてきた。
- ③支える(相談援助): 関わりの深かった患者さんとの死別によるボランティアの悲嘆ケアや、ボランティア同士の間人関係の問題の調整をする。
- ④調べる(調査, 研究): 危機管理や、よりよい活動を行うために工夫, 調査をする。



(大阪ボランティア協会「事業報告書綴」を参考にして作成)

図1 ボランティア・コーディネーションの機能

これらを「つなぎ」「まとめる」ことが、コーディネーターの役割である。

## 展望と課題

ボランティア活動者も増え、チャプレン兼務の状態では、コーディネーター1人では、役割を担いきれなくなってきた。また、初めに記したように、病床数が増えたことにより、個々の患者さんの把握が困難になった。よって、病院内のスタッフ

(チャプレン、看護師長、担当看護師、ヘルパー、ソーシャルワーカー)で「ボランティア運営委員会」という組織をつくり、定期的に(月に1回)会議を開き、役割を分担し、情報の共有を行っている。

現在、その委員会で、課題と提案として次のことが挙げられている。

①ボランティア会が自立して活動するようにして、スタッフの負担を減らせないだろうか。

②スタッフとボランティアが気軽に声をかけ合える信頼関係を構築し、たとえばナースが直接、ボランティアに依頼できるように機動的に対応できないだろうか。

③難しい学習を経なくても、気軽に間接的な活動(新聞折り、花の手入れなど)を行う活動者がいてもよいのではないか。

筆者は、まずボランティアが目的を共有し、留意すべき点について理解しているのならば、さまざまな発展的な活動ができると考えている。しかし、そのためには、「ボランティア運営委員会」が、おのおのの個性、特性を活かして力を発揮できるようにボランティアを把握し、連携と意思統一をして、上記に示したような「コーディネート」ができるように模索していく必要があるだろう。課題は多いが、緩和ケア専門病棟として、ボランティア活動は欠かせない意義あるものであることには変わりはない。